

# 石巻市内で活動している社会福祉法人のご紹介

## 第6回インタビュー

### 社会福祉法人夢みの里

平成28年4月から改正社会福祉法により、社会福祉法人による「地域における公益的な取組（社会貢献事業）」の実施が法人の責務として位置づけられました。

この取組は、次の3つの要件をすべて満たすことが必要となります。

- (1) 社会福祉事業または公益事業を行うに当たって提供される「福祉サービス」であること
- (2) 「日常生活又は社会生活上の支援を必要とする者」に対する福祉サービスであること
- (3) 無料または低額な料金で提供されること

具体例としては

- ・ 夏祭り等、イベントの開催による住民間のつながりの再構築
- ・ 働き手が少ない商店街との連携による就労支援
- ・ 公共交通機関がない地域での移動支援や買い物送迎支援
- ・ 災害支援ネットワークによる避難所支援
- ・ 刑余者の自立支援に向けた自立準備ホームの登録

などが挙げられます。

石巻市内にはたくさんの社会福祉法人がありますので、実際にどんな社会貢献事業に取り組んでいるのか、順番にご紹介していきたいと思えます。

今回は「社会福祉法人夢みの里」さんをご紹介します。

インタビューにお答えくださった方は、理事長の菅原桂子さん、事務局の長谷川悠さんの2名です。

### 社会福祉法人夢みの里

- |         |   |
|---------|---|
| ■法人所在地  | 石巻市門脇町一丁目2番21号 UniversalPlaza櫻樹の森1F   |
| ■電話番号   | 0225-22-1416  |
| ■ウェブサイト | <a href="https://yumeminosato.jp/">https://yumeminosato.jp/</a>   |
| ■設立年月日  | 平成22年3月29日  |
| ■事業     | 短期入所、日中一時支援、生活介護、共同生活援助、就労継続支援B型、計画相談支援、地域密着型介護老人福祉施設入所者生活介護（地域密着型特別養護老人ホーム）、通所介護、保育所   |
| ■施設・事業所 | 共同生活援助夢みの里こもれび（グループホーム21か所）<br>デイサービスセンターこもれび、デイサービスセンター桜・さくら、トータルサポートセンターみんなの夢広場、共生型福祉施設はびねすプラザ、ゆにばーさるプラザ、Ecoリサイクル松並工場、相談支援センター桜・さくら、特別養護老人ホーム、ラ・ヴィアンロゼ桜の園インターナショナルプリスクール（ピノッチオ、ブルーバード、レインボー、リトルマーメイド）   |
| ■社会貢献事業 | (1) 有事の際の福祉避難所としての機能を持ったグループホームの運営<br>普段は地域の交流の場として、カラオケ機器等を整備していることから、町内会などで利用してもらっているほか、リポーンアートフェスティバルのボランティアの宿泊所としてなど、多岐に渡った活用をしてもらうため、貸出をしています。<br>(2) 低所得世帯に対する住宅賃貸事業<br>生活支援が必要な生活困窮者に対する住居の確保・提供を行っています。<br>(3) 音楽活動による地域交流<br>ピアニストや音楽の先生の指導による100人規模のコーラス隊で、とっておきの音楽祭、大崎福祉夢まつり、地域交流祭、トリコローレ音楽祭など、毎年様々な地域の行事に参加。本人たちの誇りや意欲にもつながっています。 |



——今回は障害者福祉を担う社会福祉法人として、夢みの里さんのご紹介です。社会貢献事業について、お聞かせ願います。

**菅原：**地域の人のためになることを掲げて、当法人をスタートさせました。利用者さんを第一に考えることを基本としますが、地域の方々にとってもプラスになる、この施設があって良かったねということも考えて事業展開しています。

地域の方々にとって何がプラスかと考えたときに、たまたまご寄附していただいた土地にグループホームを作り、そこに福祉避難所も兼ねることを思いつきました。建設した建物は有事の際に使われる施設でありつつも、普段は地域の交流の場として、カラオケを設備して町内会長さんの管理下に置いています。今回、その場所を、石巻市と宮城県の許可を得て、石巻市で行われていたりボンアートフェスティバルのアーティストの宿泊所など多岐に渡った活用もしています。

——ご寄付いただいた土地を自法人だけの活用だけでなく、地域に提供するということが良いですね。

**菅原：**ご寄附してくださった方が、重度の障がいを持たれたお子さんがいた方なので、障害者福祉に使用してほしいという希望をいただいていた。お亡くなりになったときに3か所の土地をご寄附していただき、その1か所が先程ご紹介した福祉避難所を併設した重度障がい者

のグループホームになっています。その他の建物も地域貢献を目的としており、高齢者やシングルマザーなど低所得者を対象とした借家の運営を行っております。



福祉避難所付きグループホーム あじさい館

——制度の狭間、どのサービスも該当しないところを救うという取り組みですね。

**菅原：**制度があれば行政等で対応できますが、高齢と障害の制度の狭間で苦しんでいる人や行くところのない人のお世話をし、次のステップにお送りするということが、今私たちがやらなきゃいけないことかなと思っています。社会福祉法人は制度上優遇されている立場でもあるので、それを地域のみなさんにどうお返しするかを考えていかななくてはなりません。

今から15年前に当時の浅野史郎知事が船形コロニーの施設入所者を地域に帰すという「船形コロニー解体宣言」を行いました。その宣言を受け、石巻地区にも施設入所者の受け皿を1か所作するという話があり、当時、英語の教育をしていた私が縁あって協力させていただきました。当時私は障がい福祉についてはまだ素人だったため、研修を受けさせてもら

い、それからお引き受けいたしました。引き受けた7人の中に先ほどお話しした、土地をご寄附してくださった方の息子さんがいたのです。

32年ぶりに地域に帰った人たちと一緒に、今は共同墓地の清掃活動を年4回、これまで15年続けてきました。目立たないけど人の役に立つことで、自分たちが地域へのお返しができるばと思っています。



左が理事長の菅原桂子さん、中央は事務局の長谷川悠さん

——人のためにする、恩返しなどのお礼をすることで、社会参加にもなりますね。人の目には触れる機会は少なくとも、見てくれる人がいて、逆にありがとうと言ってもらうことでお互い交流が生まれるということですね。

**菅原：**それから障がいのある方にどうやってプライドを持ってもらえらるかと考えたときに、地域に出る機会として、とっておきの音楽祭が始まったときから参加しています。とっておきの音楽祭 SENDAI、とっておきの音楽祭東まつしま等への参加、そのほかにも、大崎福祉夢まつり、地域交流祭にも参加してきま

した。私たちは、ピアニストと指揮をする音楽のプロの先生をお招きし、ただ集まって、「さあやっぺし」ではなく本気で取り組むことこそが障がい者の方々にとってプライドを持てることだと思っています。その先生のお力で、今ではトリコロレ音楽祭や石巻市民の合唱祭にも参加しています。年に6回ほど、外回りをして、100人規模で歌うので、今ではステージに職員が立つ場所がなくなってしまい、見る側になってしまったのですが、1回目よりも2回目、2回目よりも3回目と、みなさんが人前に出ることで、歌う姿勢が段々と変化してきました。まっすぐな姿勢になり、先生の方をきちんと見るようになりました。そういった「歌うこと」の集大成として法人で遊楽館のステージを使い、NHKのど自慢を模倣したカラオケ大会を行いました。歌うことが苦手な人はバックコーラスに回ってもらったり、職員たちが仮装させたりして参加してもらいました。1回のみで開催と思ったところ好評で、コロナ禍によってできなくなるまで、5回開催しています。



トータルサポートセンターみんなの夢広場

——本人たちの意欲に繋がっていますね。

**菅原：**はい、生きていくのに明るく見えますでしょ。「障がい」という言葉の持つみなさんのイメージは、恐らく暗い色なのだと思います。でも、そうではないです。もっと明るいです。そのイメージを変えていくものが余暇活動です。

また、「働く」ということに意欲を持っていただくために、ペットボトルのリサイクルを行う工場ができたんですが、建設にあたり障害福祉分野だけではなくて、環境政策分野にも賛同していただき補助金をいただきました。事業開始後、関係するみなさんからは「障がい者施設がリサイクル企業と同じように、ペットボトルを集め、粉碎して再利用するということは、すごいことですよね。」と言われました。東松島市の業者さんがバックアップしてくれていろいろ協力も得られてこの事業はできていますが、私が考えている障がい者が誇りを持ち、限りなく一般就労に近い事業所になったのかなと思っています。(令和3年)4月には、正式にフル稼働になりました。

——垣根を越えて、福祉以外の分野、業界とのコラボレーションは必要と思います。

**菅原：**「働く」のなかでは農業分野にも力を入れています。田んぼを40反お借りし、約700袋のお米を作っています。加工物として味噌を2.5トン製造し、市立保育所に納品しています。本法人に

はグループホームが21か所、保育所が4か所ありますが、全施設が農産部で製造した味噌を使っています。あとは野菜と梅干しも300kg程作っています。グループホーム入居者が約140人、保育所が約300人の利用者があり、日々提供する食事の食数は給食業者並みです。食材を内部事業所で使うことで、農業に携わった利用者の安定的な賃金になるわけです。ほとんど法人内消費ですが、有機栽培に近いので、味が良いと評判です。それでも、お米が足りないので普通に流通しているお米を購入するんですが、保育園の子どもが味の違いを感じて「このご飯、いつもの味と違う」と言っています。このことは、子どもたちの食育に繋がっているのかなと思います。農薬を極力使わないことや味噌は添加物を使わず、梅干しは8%の減塩と健康志向です。福祉と農業や福祉とエコの組み合わせ、面白いと思いませんか。

——蔵王町にある「蔵王すずしろ」(社会福祉法人はらから福社会運営)さんでは、利用している方の工賃が高いことで20年以上前から有名です。障害者年金に工賃を足せば生活できるとのことですが、工賃の高さ以外にも、利用者自身が社会の一員という認識ができるようで、これはペットボトルのリサイクルにしても農業にしてもそれに取り組むことで同様に感じられるのではないのでしょうか。

**菅原：**誇りをもって仕事をするというのが大事ですね。生活保護を受けるということは心の負荷なんです。社会保障である障害年金と働いた工賃とで生活が賄えるようにしたときに、背中が曲がって生活していたのに背筋が真っ直ぐになるのではないかと思うんです。誇りですよ。そういう生き方ができる支援を目指していきたいと思います。

——福祉にあまり縁のない方からすると、支援が必要な方は年金や生活保護受給者というイメージがあると思うのですが、社会の中でこのように活躍している、担っている部分があるということを知ってもらっただけでも、自分たちも誇りに思えるんじゃないかと思いますね。

**菅原：**「生きていて良かった」みたいな感情が生まれますね。これまで自己肯定感を持ってない多くの人を見てきていますから、そう感じてもらいたいです。また、精神障がいの方で、20年間精神病院に入院していた人がいて、最期はうちの施設でお亡くなりになったんですけど、病院から地域へ移るときに「これが自分にとって最後のチャンスなんだ」ということで、こちらもその想いを大事にし、応えてきたのですが、10年、15年もうちの施設で住み続け、そのうち画家になりました。絵が好きだという人には絵を描いてもらう。そういうスタンスでおります。その方は作品を出展したところ受賞し、それからは周囲からは「画伯」と

呼ばれ、本部ビルの5階にメモリアルギャラリーを作りました。その人その人が、どこで輝けるのかそういうのを見つけてあげたいと常々思っています。



社会福祉法人夢みの里法人事務所のある  
「Universal Plaza 櫻樹の森」

——自分自身の力だけでは生きていくための環境作りは難しいですし、特に意思表示が苦手な方々も多いと思いますので、個々の持っている能力を引き出す、うまく社会と繋げていく役割が福祉専門職のポジションなんだろうと思います。

**菅原：**社会保障があって生活ができていますが、重度の障がいがある人も、存在するだけで社会のお役に立つと思うんですね。福祉というものは、どんなことでも社会へ仕掛けることができ、そこに良い反応があったとき、「ああ、やって良かったな」と思うときがありますし、私自身このようなことの連続の15年を過ごしてきたんだと思います。

——夢みの里さんは、高齢者から障害者、子どもたちと幅広い分野の事業展開をされておりますが、一つの制度だけでは制度に該当する対象者だけしか支援できず、

世帯丸ごとを支援するということがなかなかできないということが課題となっています。

**菅原：**本当は制度で分断することは、おかしいと思います。ただ、これらの支援を同時にやってしまったがために、素人だった私は失敗の連続でした。制度もよく知らないし、3つの制度ですから。それで職員も苦勞していると思います。しかし、これが普通の支援のあり方だなどは思っています。



共生型福祉施設はびねすプラザの交流事業

—それぞれ福祉分野に特化した専門のスタッフが集まることでチーム形成ができてきますね。

**菅原：**利用者も職員もその人その人の持っている役目を果たしてもらいたいなとも思っています。一番はじめの事業所は、和渕の箕入にある「こもれび」です。そこからこの法人がスタートしたのですが、障害支援区分が支援の度合いが高い「区分6」の方々を対象としています。しかし、みなさん元気でシャキシャキとしていて、役目を果たそうとしているなと感じます。

また、職員の中には、和菓子職人や料亭に努めていた人・仕出し屋さんの経験のある者がいたり、他業種の経験を生かして得意技を活かして役目を果たしてもらえればと思っています。



デイサービスセンターこもれび

—利用者の方がいろんなことにチャレンジできるためには、スタッフに多様性がないとなかなかできません。弁当があり、リサイクルがあり、クリーニングもあり、人の生活に密着した仕事ですね。

**菅原：**他から持ってこないで、法人内消費、利用者さんの衣類などを洗うだけでクリーニング業が成り立つわけです。清掃も同じです。

昨日（令和3年7月28日）オープンの「ラブリースイーツファクトリー」なんですけど、道路を走るときこの看板が気に入られて、商品シールも考えて真っ赤なハートに緑のリボンを結んで。でも、障がい者の出す商品では、おまけは提供しなくてははいけません。「障がい者の方々が作ったから買ってください」という考え、甘えちゃだめですよ。

——確かにそれはあると思います。「障がいの方が作ったものだから買ってみましょう」という言葉には、「買ってあげる」という言葉が隠れていそうですが、本当においしいものだったら、いくらでもお金を出しますという意識が働きやすいと思います。

**菅原：**石巻で和菓子作っているところはあまりないので、10年位修行してきた素晴らしい技術を持っているスタッフの力を活かしてあげたいと、そして職員が持っている得意技も生かしつつ、利用者がそこで主役になっているという形です。

——結構こだわりを持っている利用者の方もおりますでしょうか。長いこと携わっていたら技術を磨いて職人になれる方も出てくるのではないのでしょうか。

**菅原：**おりますよ。発達障害をお持ちの利用者の方とかがそうですね。職人レベルの方は厨房に1人います。ご本人は、ここに来て良かったって話しています。民生委員児童委員協議会の方々が視察に来られた際に、その方に話してもらいました。その方はグループホームを出て、市営住宅を申し込んで一人での生活を始めています。能力が高いので一般就労と同じくらいの賃金で仕事をしています。みなさんの前で「人生やり直しができました」とそんな話を聞いたときにウルッと来ました。

——みなさんそれぞれ主役になれば、そのスポットが当たるお手伝いができることは嬉しいことですね。

**菅原：**逆に私たち支援者が役に立つ場所を作ってもらっているようなもんじゃないですか。そう思いますね。



— インタビューを終えて —

障害者、高齢者、児童と幅広く事業展開をしている「夢みの里」さん。施設を地域の交流の場として開放したり、清掃活動を行ったりと、地域との繋がりを大切にされていらっしゃるのを感じました。

また、利用者が輝けて、意欲につながる余暇活動に取り組んだり、農業やリサイクル、お弁当からスイーツを作ったりと事業展開が多岐に渡り、様々な取り組みを行っています。利用者の特性や希望を活かした仕事を、スタッフとともに作り上げている様子や新たな取り組みなども伺えました。